

414  
4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

始





大正  
13.3.31

大正  
13.3.31  
製本

法隆寺大鏡第五十四集挿圖解説



- 第一、金堂正面
- 第二、同正立面圖上層軒行四十五尺九寸五分
- 第三、同側面
- 第四、同側立面圖初層軒行三十五尺三寸四分高十九尺六寸四分上層軒行三十二尺二寸四分高十三尺二寸四分
- 第五、同内陣光景東側
- 第六、同上南側其一
- 第七、同上南側其二
- 第八、同上北側
- 第九、内陣組物其一
- 第十、同上其二
- 第十一、内陣天井及支輪
- 第十二、同上南側
- 第十三、排風拜金物一尺九寸九分
- 第十四、屋瓦及伏藏瓦一尺二寸厚二寸
- 第十五、扉
- 第十六、扉金物其大
- 第十七、裳階組物正面
- 第十八、同上側面

金堂は二重基壇の上に建ち、基壇の上層は凝灰岩を用ひ、下層も元と同種の石造なりしが、何時の頃よりか花崗石と取替へられたり、堂は重層建築にして、前に示せる尺度に據りて明らかなる如く、下

層の桁行梁間共に上層に比して十三尺の差を有せしめたるを以て、この差額の大半は簀波の觀を著くするのみならず、又安定の意を加ふるに力ありと謂ふべし、是を扶けて更に其の美を添ふるものは、屋蓋の構造殊に軒の線にして、單層の軒を使役しながら其の出を深くし、其の反りを強くし、鳥の兩翼を張り掲げて、將に飛び立たむとするの態あり、此の軒は所謂雲形の肘木及斗拱に依りて支持せられ、軒を傳へる輪廓の線は、直次に折線によりて柱に移ること無く、雲形の變化ある面線を辿りて益々美感を深くするものあり、此の四隅に於ける雲形組物は建築の骨子たる柱と其の翹麗たる軒との連結を計りて、軒を支持する力量を強むると共に、軒に輕快の美を與ふるに、最も苦心せられたるものと謂はざるを得ず、肘木は鼠斗によりて、鼠斗はエンタシスを有する柱によりて支へらる、柱の上殺下肥の形式は、又最も能く雲形曲線と調和を得たるのみならず、全建築に安住の感を與へて、鈍重に陥らしめず、輕快にして莊重の趣致を失はざらしむるに至れるなれ、雲肘木と柱とは實に本建築の生命なりと謂ふべし、柱間は五間四面、正側兩面共に左右の一間宛を狭くす、上層に在りては正側各二間宛を減ぜり、斯くて下層の五間は上層に於て四間となり、四面は即ち三面となる、偶奇奇偶と遞代して變化せしめたる中に、自ら統一的の美觀を計れるものあり、内部は内外兩陣に分たれ、内陣は三間二面の柱間を有し、中央に土壇を設けて諸佛諸尊を安置す、即ち東方の扉を排して入れば、先づ四天王の一なる毘沙門天及玉蟲厨子あり、南面に廻れば中央に釋迦左右に樂師阿彌陀の三尊佛及持國增長の二天王あり、西面には廣日天を安んじ、



北すれば即ち結夫人の厨子入念持佛並に彌勒菩薩觀音等を拜するを得べし此等の光景は足一度本堂に入れるもの、秘知する所なればこれが詳説を略し、一々の尊像に就きても、本集別に録する所あるを以て、これに譲らんと欲す、内陣の莊嚴に對して、外陣の壁には悉く四佛の刹土若くは諸尊の像を繪きて莊飾せられ、繪畫と造像と相俟つて、堂内即ち淨土結界の真相を呈し、漫に菩提成覺の樂しき觀を憧憬せしむ、壁畫の詳細は他日其の刊行を終るを俟ちて説く所あらむ、堂内の構架法は外部に見ると同じき斗拱肘木を用ひ、堂の大きさに比して其の柱の偉大なるだけ、組物の木割また雄勁にして、大伽藍の面目を躍如たらしむ、組物其一是中間に介在するものを示し、同じく其二是四隅に在るものを現はせり、外部に在りては四面を露出せざるを以て、便宜内陣のものを影出すこととせり、内陣の天井は組入の藻井にして、小壁の上より斜に出せる支輪によりて撐げらる、後世の支輪は其の名の如く著しき曲線となり、支持の力よりも却て裝飾的のものとなれども、本建築に在りては古今目錄抄にも屋在組入天井上堅利（五五）とある通り、所謂堅利の稱號に叶ひて、殆ど直線をなし、支持の力に併せて裝飾的の意味をも發揮するものあり、外陣は單に藻井のみを用ひて支輪を取らず、内陣は母屋、外陣は廂に相當するを以て、建築上の必要もあれども自ら裝飾的にも精粗の差を現はせしなり、天井の間毎には彩色の花文を散らし支輪間にも亦實相華の色鮮やかなるを畫きたり、建築用材は總べて楡にして、内外共に主として丹土を塗りたれども、窓勾欄の櫺子には綠青を用ひたるもあり、別當記に玄雅法印寺務の弘安六年春比當寺金

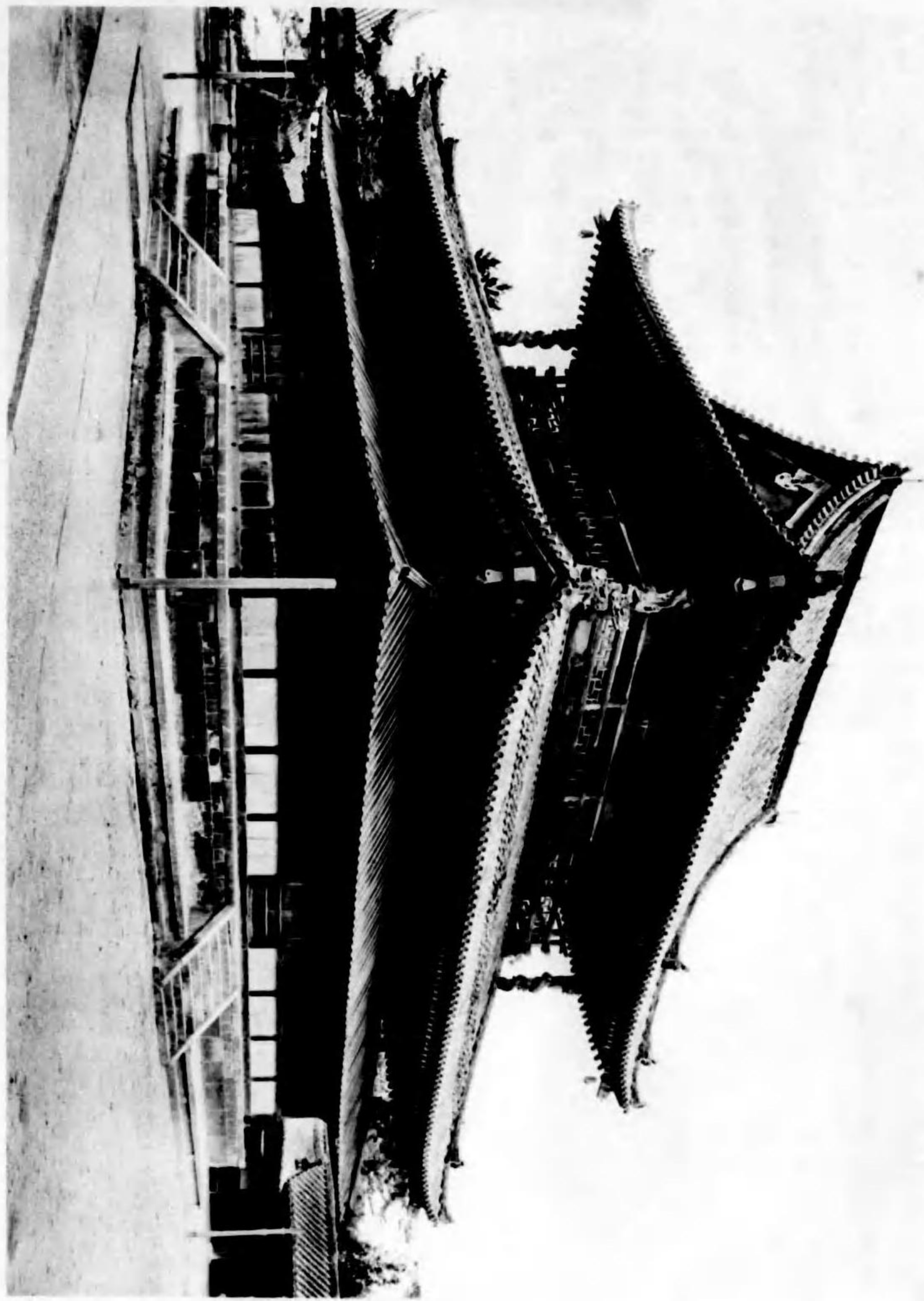
堂塔修造丹塗とあるも、舊制に倣ひしにて、今に之を傳へて變ぜざるなり、屋蓋の瓦は別當記のみに據るも、範圍僧正寺務の寛喜元年五月に葺替の記事あり、其前後にもこれありしこと實地に就きて立證せらるれど、其の鋸葺とも云ふべき様法は、玉虫厨子の屋蓋に於けると同一なれば、設ひ材料を取替ふるとも、また舊制を存して改めざりしならむ、其の創立當時の古瓦と見らるべきもの、今寶庫に存置せらる、第十四圖に示せるもの即ち是にして、其の文様、堂内なる須彌座及厨子等に密陀僧を以て繪けるものと同一にして、又其の時代を等しうせるを知るに足らむ、これと同種の金物は博風の頂角點に遺存す、第十三圖に拜金物として現はせる者にして、今尙ほ金銅の餘光を認むるを得べし、此等は皆堂の創立と共に成れること、文様の性質よりして疑を容れざる所なり、堂とは較々年代を後にして造られたるものは則ち裝飾なり、これ金堂保護の爲に補加せられたる者にして、第十七第十八の兩圖に現はせる組物を見ても、其の堂と同時の制に非ざるを知るべし、扉も堂に於けると異なりて、第十五圖に見る如く、板戸にあらずして、上に櫺子を設けたり、丸鋸盤及座金具等は、略々金堂と類似せる所あり、中に就きて當初の面目を存する者を取り、實大の形を以て、第十六圖に現はしめたり、此他金堂に關係あるものを擧ぐれば、第十四圖に示せる伏藏を、最も不可思議なるものと云はざるを得ず、伏藏とは堂の東北隅に伏せたる毘盧形の大石塊の謂にして、其の因縁を傳ふるは古今目錄抄より他にこれあるを知らず、同書にはこれ七星鎮壇觀音供壇若是佛法根源鎮壇也依此方日本佛法弘世住世鎮壇底埋七寶成驗無力時佛法滅盡窮

也故所持珍財伽藍修營用途也といひ、鎮壇として七寶を埋藏し、此の石塊を伏せて其覆蓋とせるなりと説きながら、又一方には或云御拜石也と、事もなげに考へたる説も載せたり、其の何れが真相を穿てるかを知らざれど、之を御拜石とするは、位置よりしても其の意義を諒するに苦しむ、方位よりすれば東北隅の尊崇すべきこと勿論なれば、多聞天に近く石塊を伏せたる意義の甚深なるを至當とすべきを以て、或は鎮壇の珍寶用具等は一切を此處に埋藏せしにあらざるか、東大寺大佛殿及興福寺金堂の鎮壇寶物の發掘せられたるに併せ考ふれば、此處にも復た何等の鎮壇品なきを保し難しとせず、其の存否如何は實に後の世かけて發掘の實現せらるゝまで、最も興味ある問題と謂はざるを得ず、尙ほ金堂の前に別に御拜石と稱する一大石あり、別當記憶雅法印の時文和二年七月十五日聖靈院池堤戊亥角在大石勸齋跡金堂前曳付了とあるに由れば、何時の頃よりしてか聖靈院の池邊に移されたりしを、此時齋跡を勘へて現在の位置に移せしと見ゆ、これぞ眞の御拜石の名に背むかずと首肯せらるゝとにか、金堂は一山の主腦にして、其の莊嚴諸堂の及ぶべきにあらず、遠き昔の程は今より想像するだに難けれども、堂内に幅幅飄へり、金色五彩相映じて、目もあやなる美觀を呈せし時代ありしこと、記録及遺品に據りて推察せられざるにあらず、去れど荒草蕪蔓、香華の跡も絶えかちなりし程、衰微を極めたる時代ありしこと、復寺誌を探りて思はれ得られざるにあらず、數へ盡きせぬ星霜を送り、幾世の轉變を經來つて、今に當初の面目を失はず、諸佛諸尊と共に動きなき命運の保全せられたるは、これ偏に開祖聖德太子の甚深なる功

徳の實と謂はざるを得ざるなり、本堂の創立に就ては推古天皇の御宇と傳へられたれども、説を爲す者あり、天智天皇の御宇一度回祿の災に罹り、其の後の再建に係れるなりと、いまだ的確なる論斷出てざれば、遂に適從する所を知らず、兎に角我國最初の様式を有せる佛寺建築にして、恐く世界に於ける木造建築の最古のものたることは、確説として疑を容れざる所なり。

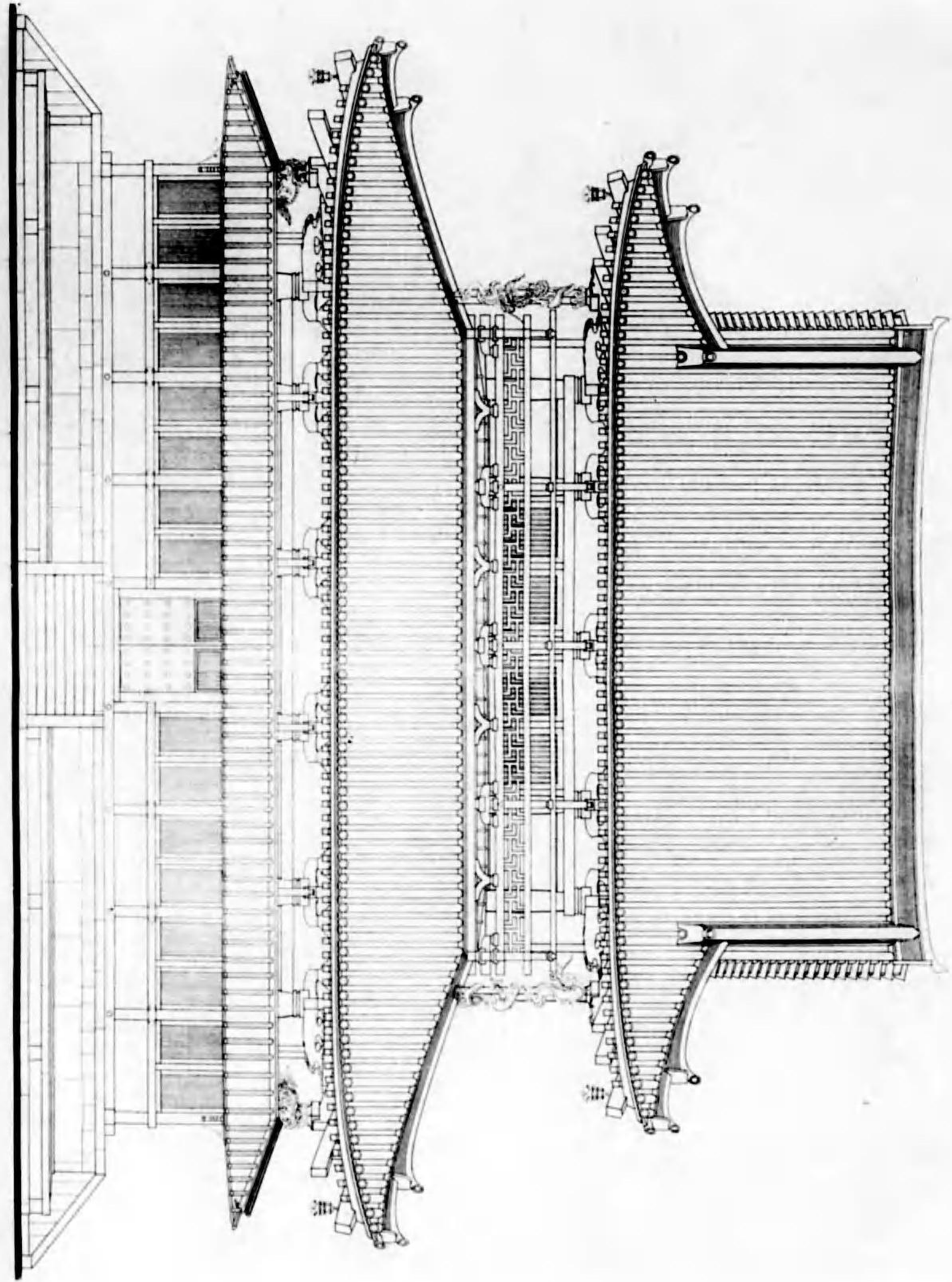
此の建物の構造は、その外観からは、  
 四角の塔の形をしており、その頂上には  
 鐘や磬が懸けられていた。また、その  
 側面には、それぞれ異なる形の彫刻が  
 施されており、その中には、龍や鳳凰  
 などの神獣が描かれていた。この建  
 物は、その独特の建築様式と、その  
 精巧な彫刻によって、その時代の文  
 化と芸術の粋を表現している。また、  
 その内部には、多くの仏像や経典が  
 保存されており、その中には、その  
 時代の貴重な資料も含まれている。

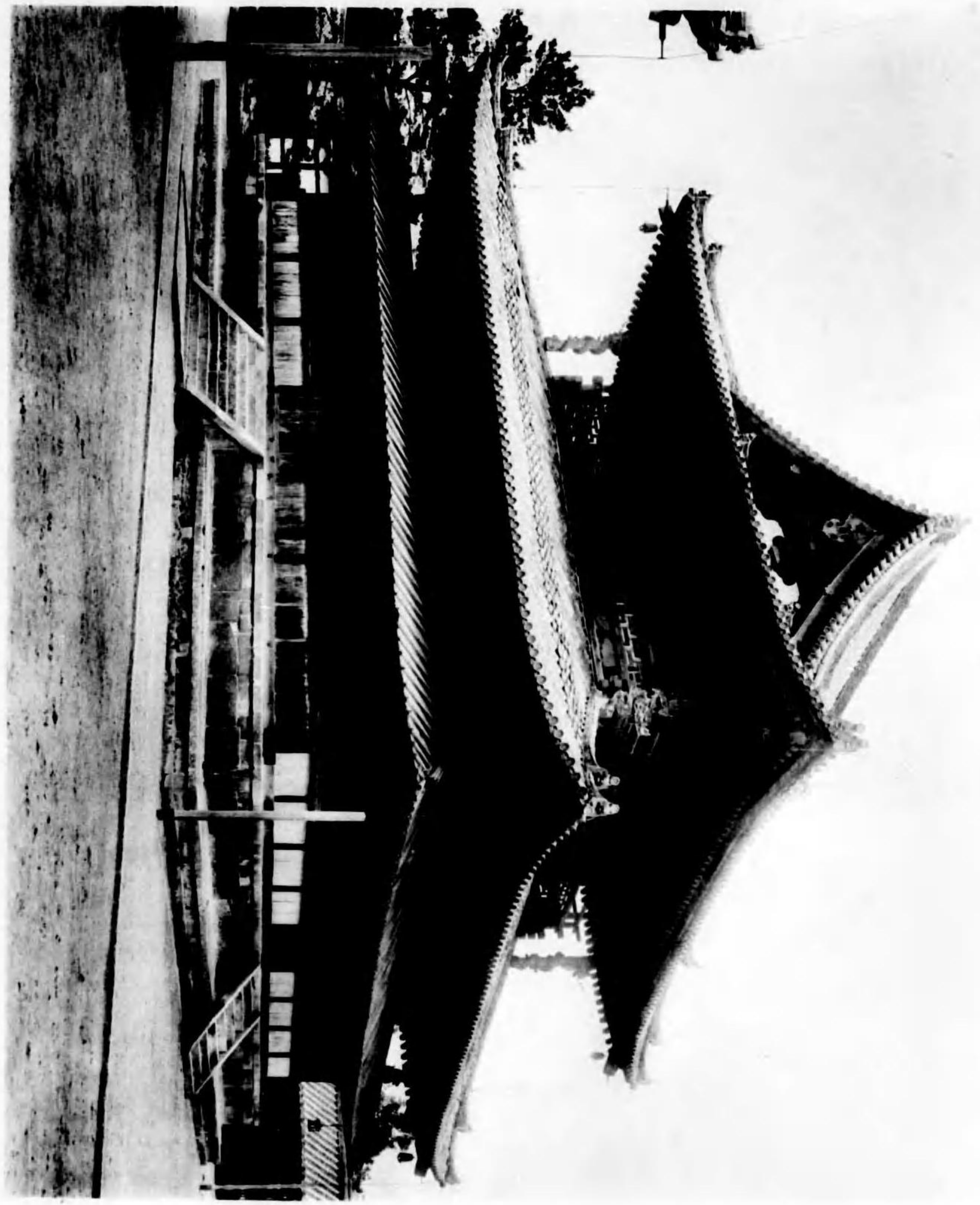
この建物の歴史は、その地域の歴史  
 と密接に関連している。その中には、  
 その時代の政治や社会の状況も反映  
 している。また、その建築には、その  
 時代の技術や材料の進歩も表れてい  
 る。この建物は、その時代の歴史を  
 伝える貴重な遺産であり、その研究  
 によって、その時代の文化や芸術の  
 発展を明らかにすることができる。



京都府立総合資料館

京都府立総合資料館

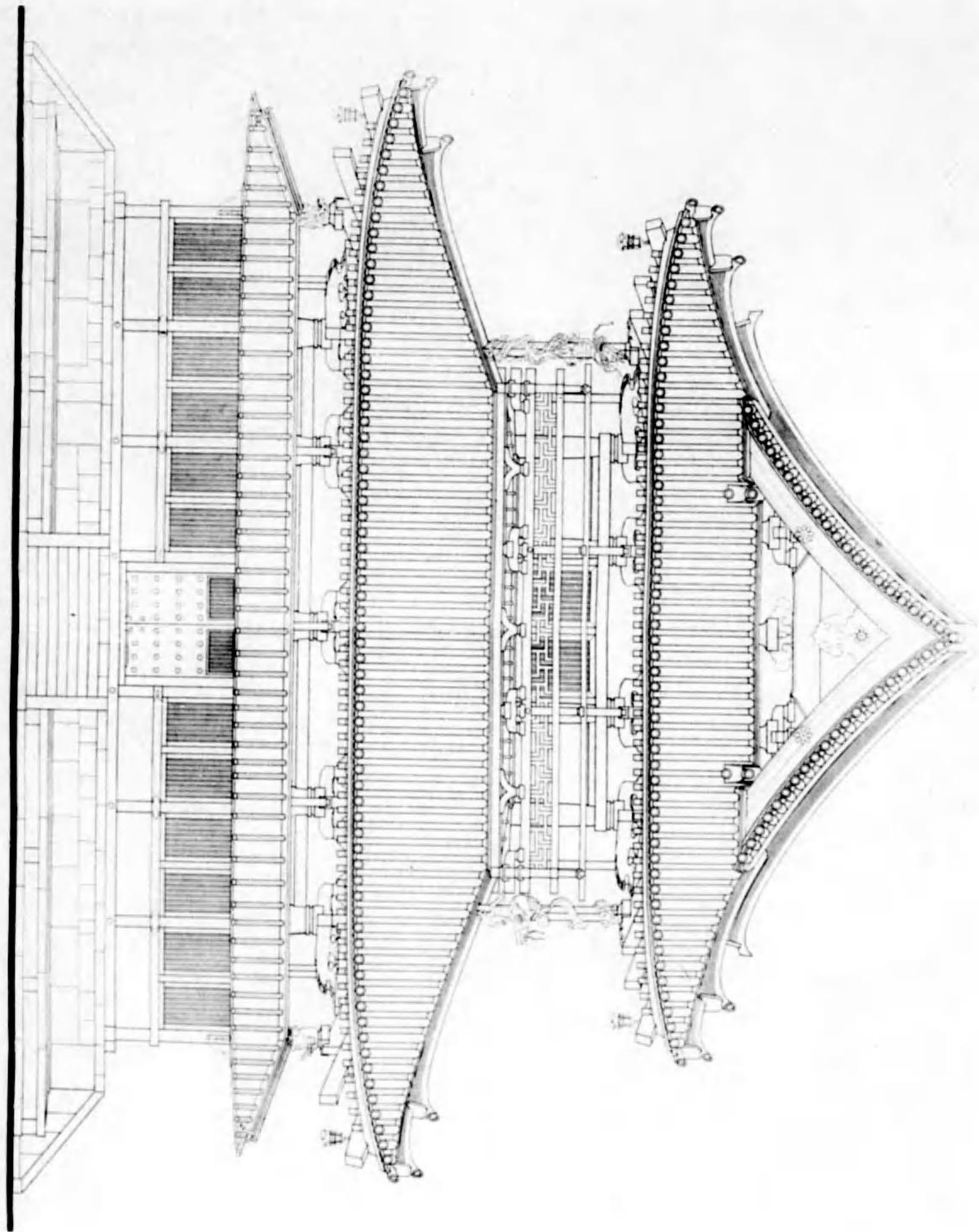




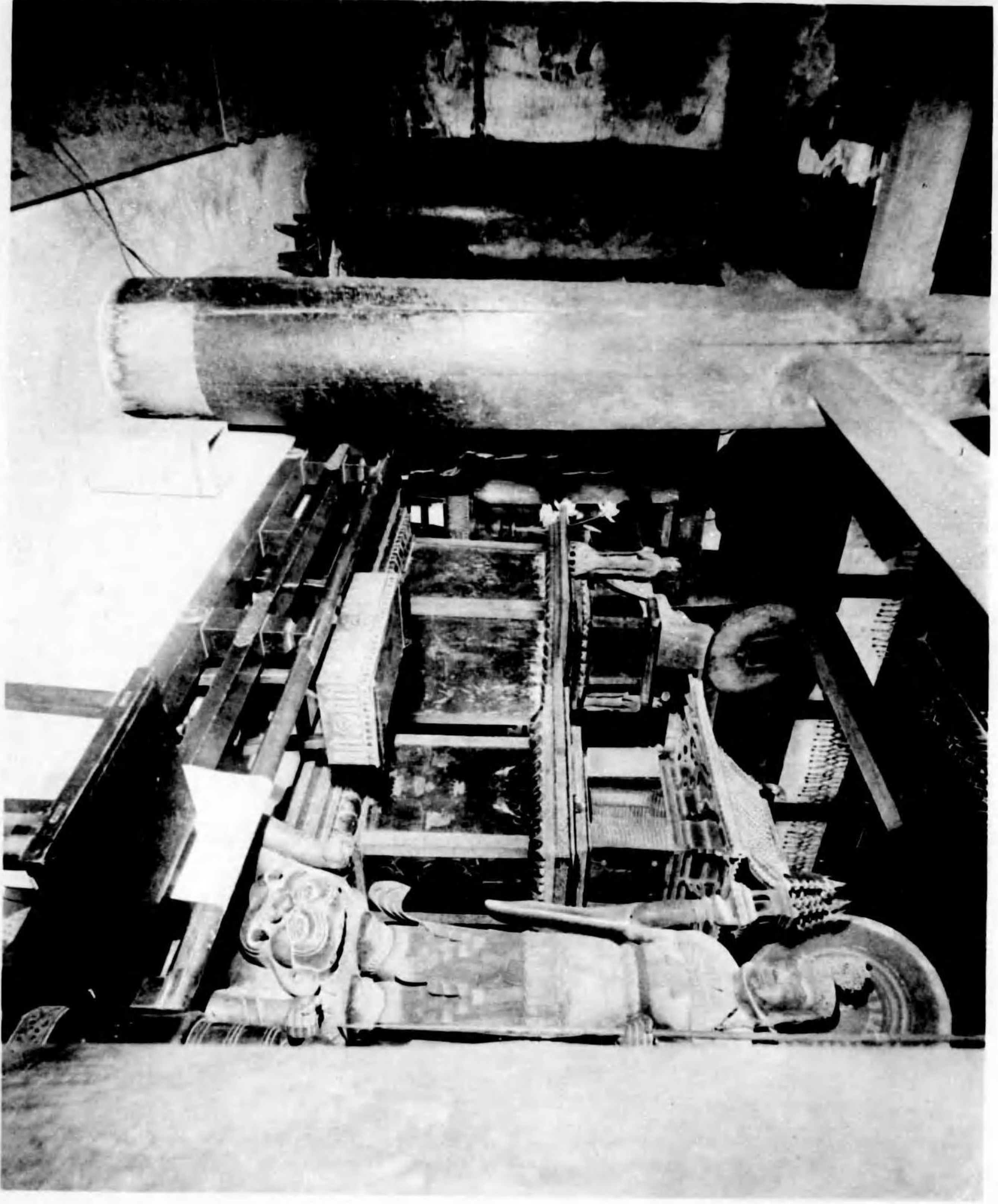
北京故宫

故宫博物院藏



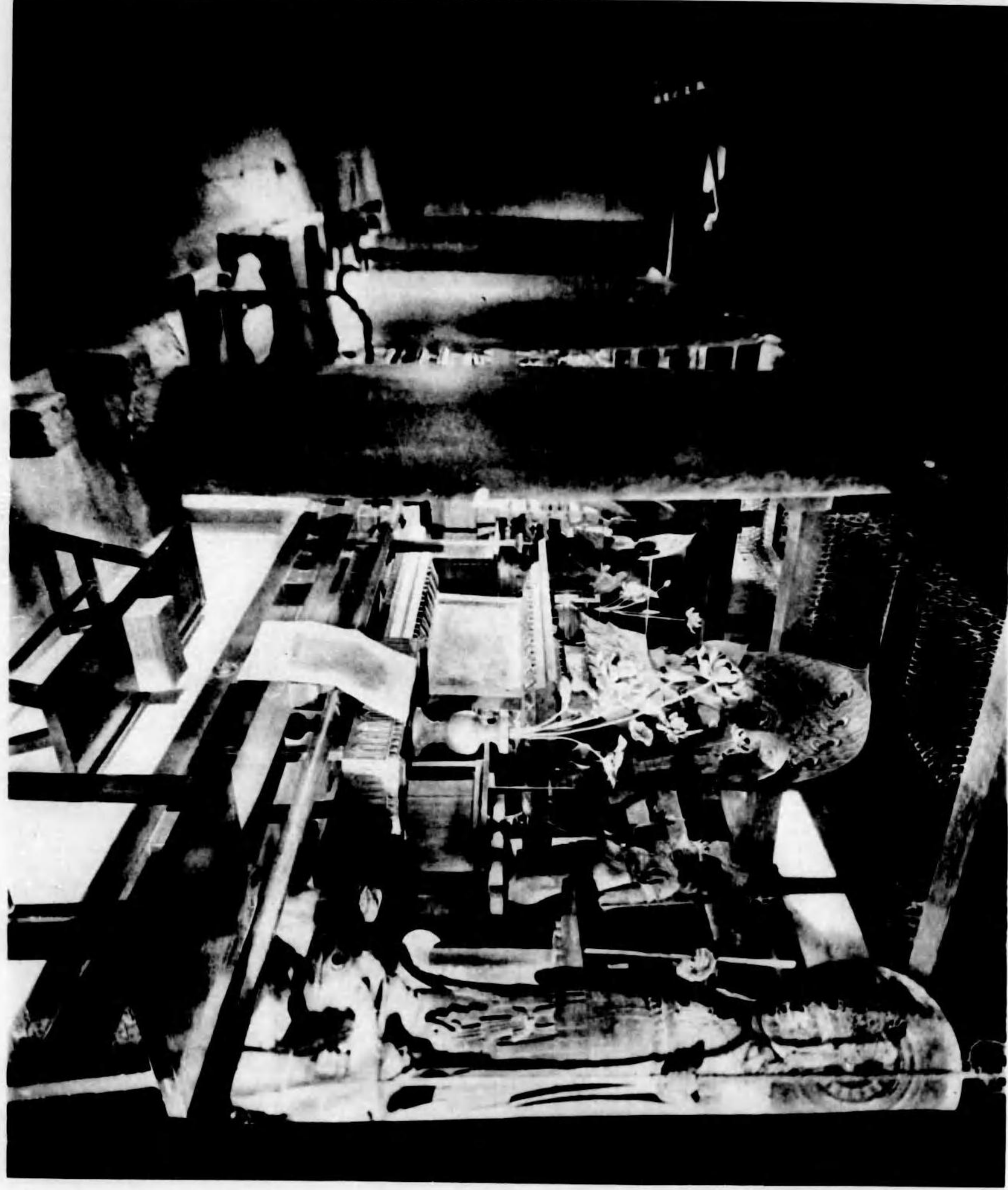


大德堂



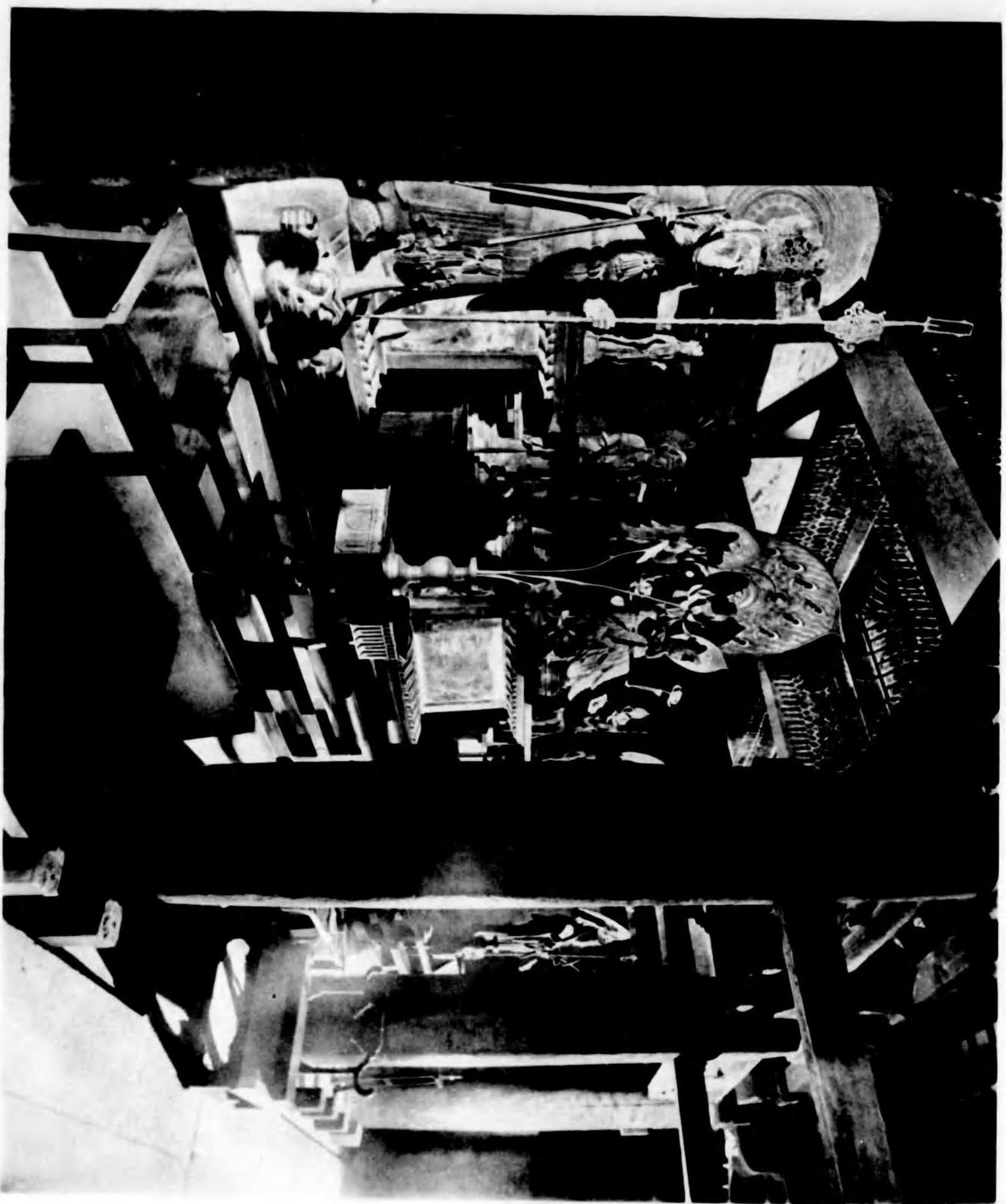
佛龕 (局部)

南京博物院藏



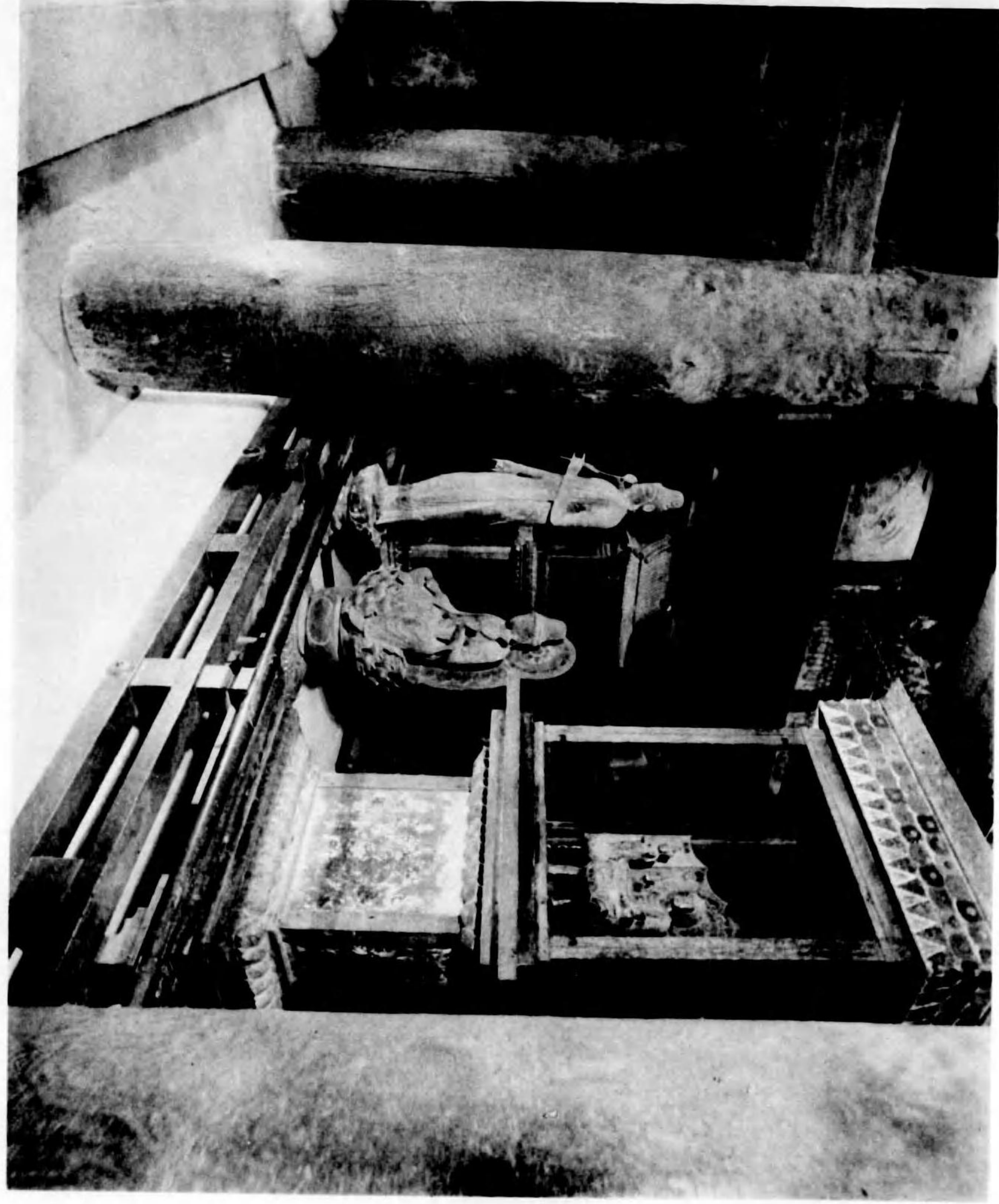
北京胡同里抬柩

北京胡同里抬柩



（二）莊園的內室

中國書畫社

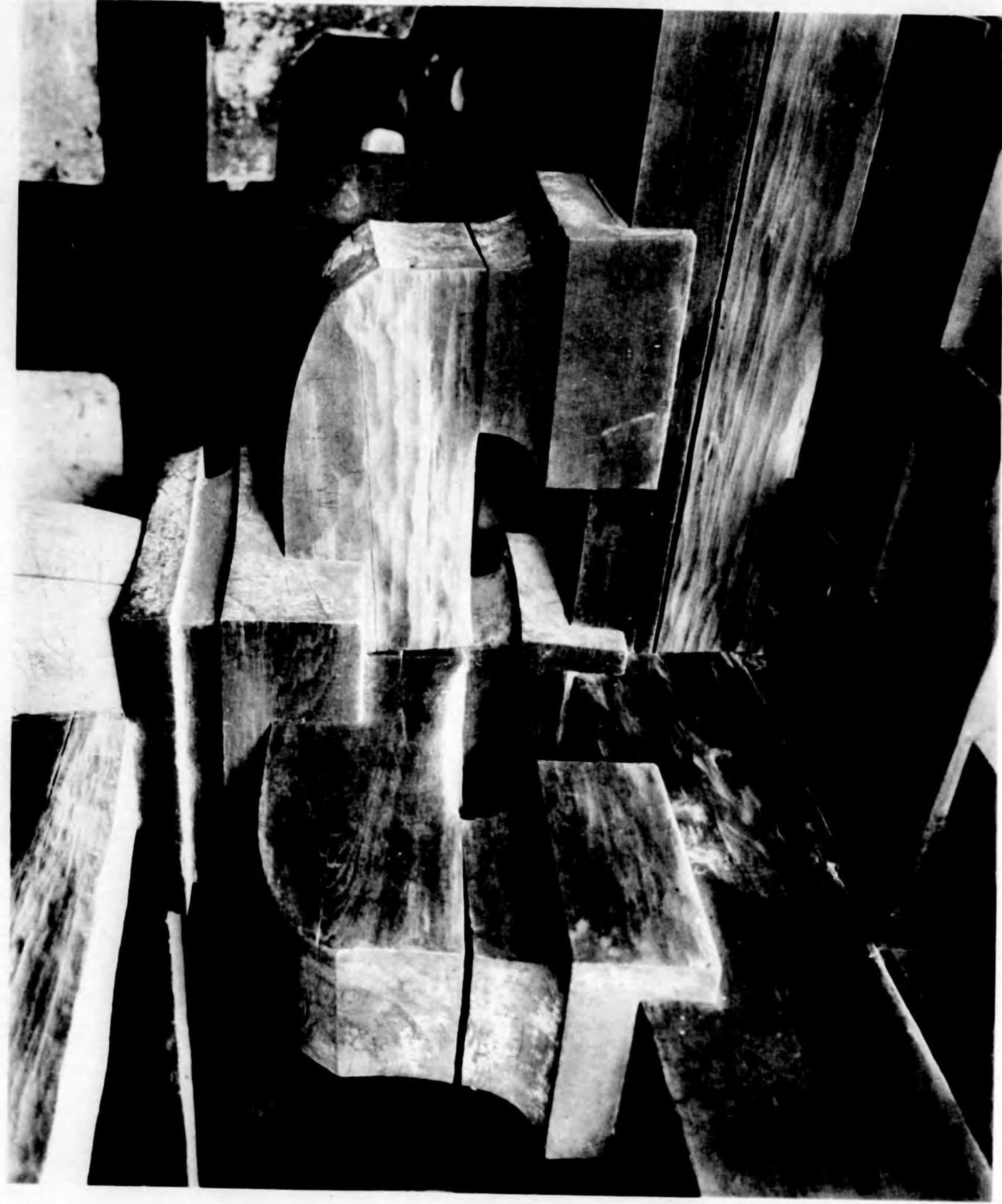


佛塔四景



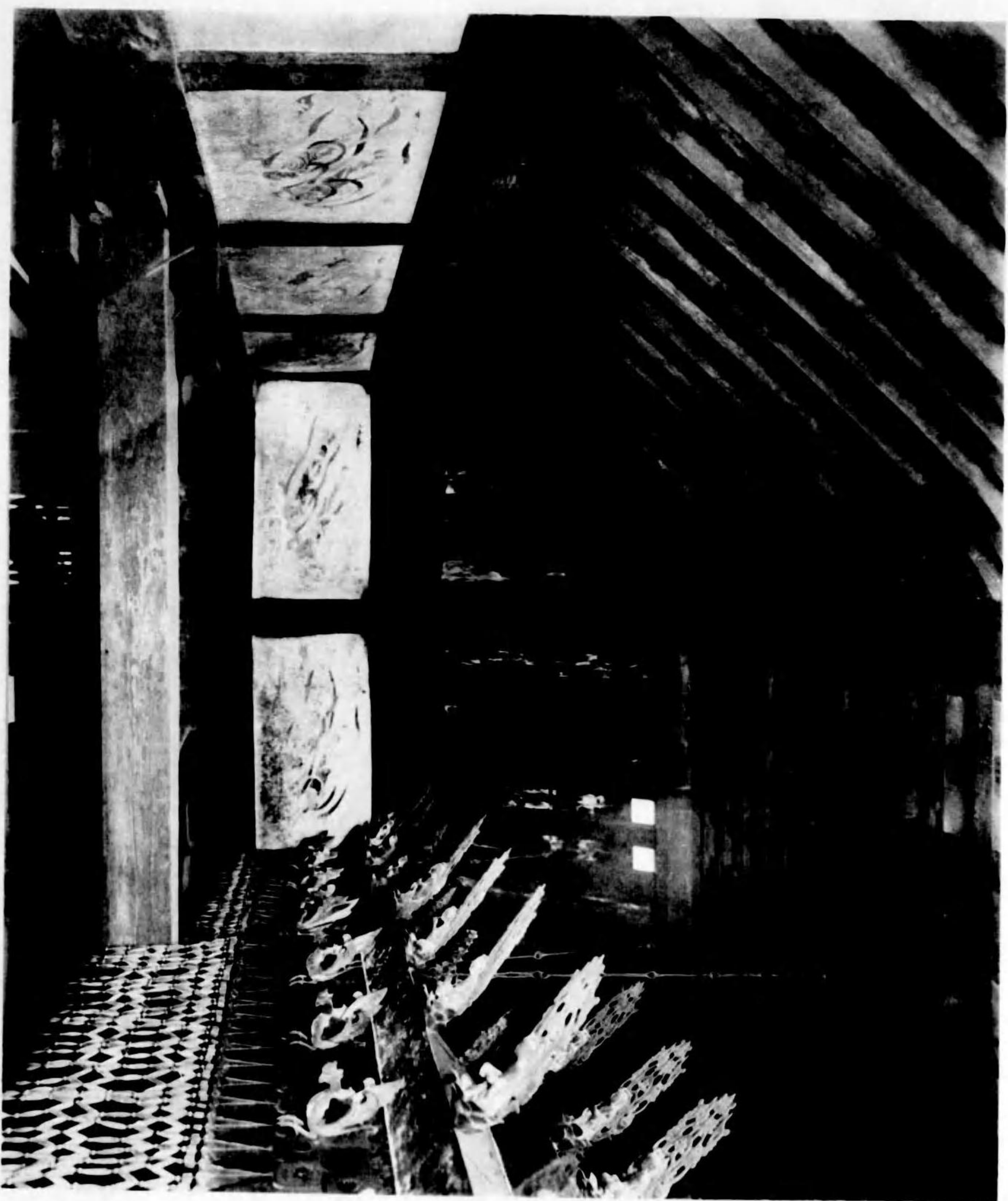
木工所内景

木工所内景



木石之韻

木石之韻



繩文及井天御內命

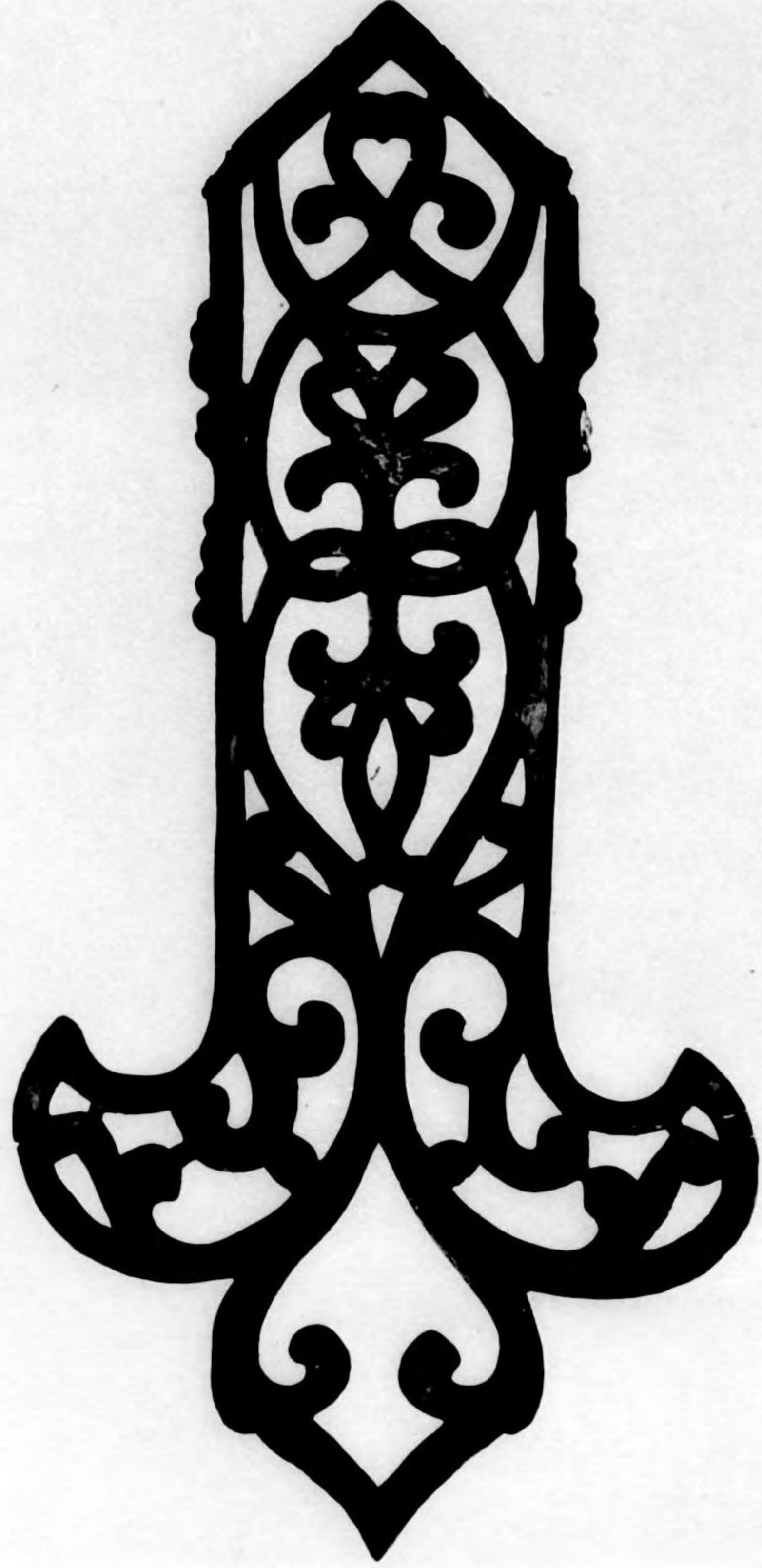
繩文及井天御內命





京都府京都市

〔圖四〕 輪支及井人陣内安全



物全拜風掛全全





其地產有煤田等

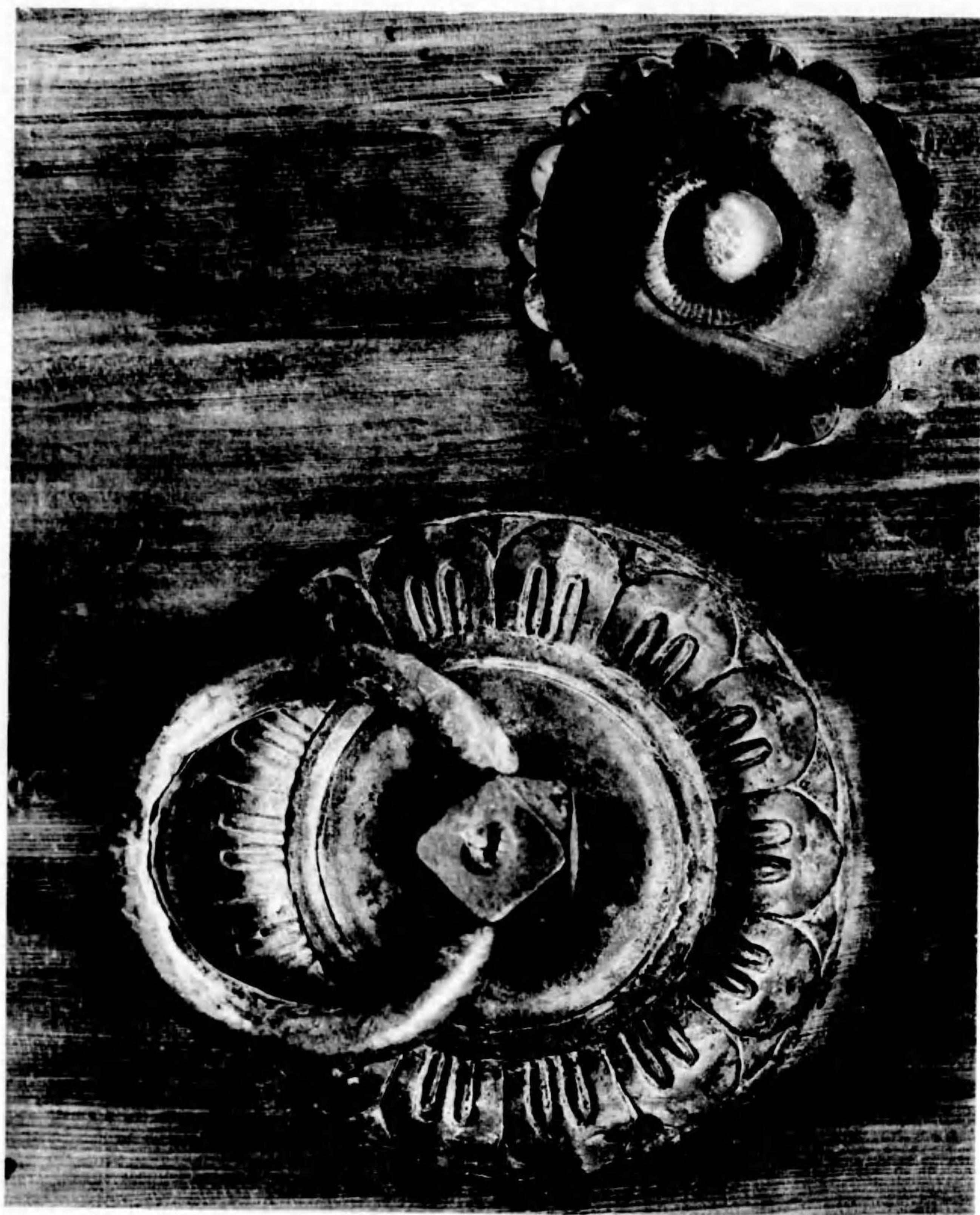
其地產有煤田等



其地產有煤田等



五十三集



古錢圖說



图 10-1-1

图 10-1-1



春秋时期铜器

春秋时期铜器

大正七年三月廿五日印刷  
大正七年三月三十日發行

大和國法隆寺藏版  
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地 白石村治  
印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地 武田勝之助  
印刷所 東京市下谷區中根岸町六十八番地 墨彩堂



終